



監督＝ピセンテ・アランダ／出演＝パス・ヴェガ／レオナルド・スバラグリア（クレストインターナショナル配給／2003年スペイン・イギリス・イタリア映画／118分）

日本人の多くは、ビゼーの歌劇『カルメン』は知っていても、フランスの文豪メリメが1845年に発表した原作の『カルメン』は知らないはず。開けてビックリ、観てビックリのカルメンを十分堪能できる映画。それにしてもカルメンの美貌、情熱そして悪女ぶりはさすが。というより神がかり的……？ あの「ドン・ホセ」でもついていけなかったのだから、俺にはとてもとても……？

♣ カルメンいろいろ

「カルメン」と聞くと多くの日本人は、ビゼー作曲の歌劇『カルメン』での有名な場面と「ハバネラの曲」など耳にやきついている有名な歌を思い浮かべるはず。また、それによって、「カルメンの物語」をすべて知っているかのように思っている人が多いはず。実は私もそうだった。

しかしこの映画を観て、パンフレットを読んで、はじめてそれが誤りだったことがよくわかった。

カルメンの原作は、フランスの作家プロスペル・メリメが1845年に発表したもの。そして今までカルメンを描いた映画はいろいろあるが、この映画はこのメリメの原作によったもの。「情熱的なジプシー女」「男を狂わせる魔性の女」というのが一般的なカルメンのイメージ。

たしかにこれは原作はもとより、歌劇『カルメン』にも、その他今までつくられてきた多くの映画にも共通するカルメンのキャラクターだが、私にしてみれば

ば、この映画を観てはじめて、カルメンという女性の本当の姿を体系的に理解できたような気がする。

映画は作家とドン・ホセとの出会いから

原作がどうなっているのか知らないが、この映画では、メリメ自身がスペインを旅する作家として登場する。

そしてその旅の途中で、今は「おたずね者」となっているドン・ホセ（レオナルド・スバラグリア）とのいい「出会い」を体験する。その後、メリメとカルメンとの出会い、そしてそこに偶然登場するドン・ホセ。

こんな冒頭のシーンを経て、ドン・ホセによるメリメへの語りの中で、魔性の女カルメンの物語が進行していくという筋立てだ。

物語のポイントは？

以下「大きなお世話」ながら、私がやっと体系的に理解したカルメンの物語のポイントを整理すれば、それは次のとおり。

- ① タバコ工場の女工達の間でのカルメンのケンカ
- ② カルメンによる真面目で勤勉な兵士ドン・ホセの誘惑と次第に深まっていく2人の仲
- ③ ドン・ホセの逃亡と山賊への仲間入り
- ④ ドン・ホセとカルメンの夫「片目」との決闘
- ⑤ カルメンと闘牛士ルカスとの新しい恋
- ⑥ ドン・ホセと闘牛士ルカスとの決闘
- ⑦ カルメンに復縁を迫るドン・ホセとこれを拒むカルメン
- ⑧ そしてドン・ホセが選んだ最後の結論

こんなポイントをおさえながら歌劇『カルメン』の物語と対比したり、その音楽を思い出しながらこの映画を楽しめば、一層興味深いというものだ……？

カルメンの魅力は女優次第！

カルメンを題材とした映画の場合、その映画の成否のカギを握るのは何といっ

てもカルメンを演ずる女優の魅力の程度。演技力は努力によって獲得できても、美貌やスタイル特に情熱的な「官能美」はその女優に備わっているもの。これらの魅力を備え、男をトリコにしてしまう女優はそうたくさんいるものではない。

この映画でカルメンを演じたパス・ヴェガは、カルメンを演ずる女優に要求されるこれらの要素をすべて満たした、ものすごく魅力的な女性。『トーク・トゥー・ハー』（02年）において劇中劇として出てくるサイレント映画『縮みゆく恋人』のヒロイン役で出演した女優だが、ドッキリするようなヌードシーンやセックスシーンも多いこの映画では、スペイン生まれ特有の彫の深い美しい顔と豊満な姿態を見せてその魅力をいかんなく発揮している。

興味深い解説に感心！

パンフレットには、① 映画評論家の渡辺祥子氏、② フランス文学者の鹿島茂氏、③ スペイン文学者の清水憲男氏、の3本の解説があるが、興味深いのは、②の「フランス文学「カルメン」にみるファミ・ファタル論」と題する解説。

まずは、「『carmen. カルメン』は、女性にとってセックスは一つの権力になりうることを教えてくれる映画です」という書き出しが注目される。次に「ファミ・ファタル」とは「宿命の女」と訳されるもので、カルメンのような女を「ファミ・ファタル」と呼ぶようだ。しかも「カルメンは同じファミ・ファタルでも、自分のしていることを百パーセント意識したうえで男を誘惑する男性的なファミ・ファタル」とのこと。

鹿島氏は「愛の調教」が成り立つためには、

- ① 男が猛獣のように単純でなければならないということ、
- ② 女が男以上に「雄雄しい」女であるということ、

という2つの条件が必要だと指摘した上で、ドン・ホセとカルメンは、外見とは異なるジェンダー（gender）（生物学的なセックスの差よりも、社会的、文化的に区別される性差を表現した最近はやりの言葉）であると分析する。

そして最後に、「ドン・ホセはいたぶられたあげくに最後は剣で止めをさされることを知っていながら、赤いドレープ（セックス）が翻っていると猛進してしまう猛牛」、そして「カルメンは、猛牛の角で殺されるかもしれないとい

う予感を覚えながらも、猛牛をけしかけるために赤いドレープをひらひらさせて誘惑とじらしをくりかえすことにエクスタシーを感じる闘牛士なのです」と結論づけている。

この分析の当否は別として、所詮男と女の恋愛ドラマ、それも最後にドン・ホセが自らの剣でカルメンの身体を刺して終わるという悲劇のドラマには、やはりセックスが重要な要素。

したがって、カルメンのセックスが「権力」となりうることを教えてくれる映画だと「見抜いた」鹿島氏の慧眼に感心。さすが恋の道に詳しい(?) フランス文学者だけのことはある……？

俺にはこんな女はとて、とて……？

このカルメンという女性を男の目から見ると、魅力的な女であることはまちがいない。その美貌とセックスアピールは抜群！ もっとも、知性は無さそう……？ しかし口は達者で、1度言いだしたら決して引き下がらない。そして自信家。自分の魅力の前に男は誰もがひれ伏すものと考えている……？ だから、男を誘惑するためなら平気でウソもつくし、そのことを悪いとも何とも思っていない。カルメンは要するにそんな女。そしてこんなことはドン・ホセも途中からすべてわかっていたはず。ところがドン・ホセはこんなカルメンにのめり込んでいき、その挙げ句の果てに……？

もし俺の目の前に、こんなイイ女が現れたらどうしよう……？ そんなことを考えているうちが華。実際にそんな女に手を出したら大ヤケドすることはミエミエ……。だから、俺にはこんな女はとて、とて……？

2004(平成16)年5月6日記